

▲▲▲
書記長の政治基盤強い
▼▼▼

時の勢いというものは、まことに
深い。これまで長く磨きついでた
けに、動き出したら弾みがついて止
まらない。ソ連は東欧諸国のように
小回りのきかない大國なので、ペレ
ストロイカも当面はこれ以上進まな
いのではないかと一般に見られてい

正論

東京外大教授 中嶋 嶺雄

たけれど、ソ連共産党拡大中央委員
会総会は、この二月七日、内部での
激しい論戦を経て、複数政党内閣
制へと道を明く政治改革の提案、
つまりソ連憲法第六條の撤廃を
もちこんだソ連共産党基本大綱を庄
倒的多数で可決した。

こうしてソ連は一九一七年のロシ
ア十月革命以来七十二年余にして共

産党独裁の革命國家から訣別し、得
来的な脱共産化、脱社会主義化への

中国の虚勢もやがて崩れる

の「バンドラの箱」を開けたと同じ
結果となり、社会的矛盾や民族問題
が一挙に噴出したばかりか、肝心の
経済は一向によくないという現
状を一挙に打開すべく、ゴルバチ

歴史を捨て去るソ連の転換

フ書記長は歴史的な賭けに出たとも
いえよう。

だが、このことは、ゴルバチョフ
書記長の政治的リーダーシップが弱
まっていることではなく、ゴルバチ
ョフの政治基盤は依然としてきわめ
て強いと私はこれまでも見なしてき
た。リガチョフ政治局員らの保守派
がゴルバチョフのリーダーシップを
おびやかすだけの政治的背景を欠い
ていること、エリツィン人民代議員
ら急進改革派がその大衆的人気にも
かわからず政治的に未成熟であるこ
とからして、ゴルバチョフに代わる
人材がないことも、ゴルバチョフ
のリーダーシップを補強しているこ
見なければなるまい。このところ、
ゴルバチョフ危機説が内外で囁かれ
ていたが、私自身はそのようには見

なまず、また、去る十一月月中旬に訪
ソしてソ連側要人とこの問題を膝を
詰めて話し合った体験からも、この
点を確認することができた。いわ
ば、ゴルバチョフのリーダーシッ

▲▲▲
本来なら裏切り者だが
▼▼▼
このようなゴルバチョフ・リーダ

ーシップは、今回の中
央総会で明らかにな
ったが、昨秋の東欧の
激動以来、これを黙認
したゴルバチョフの胸

たのではないかと私は思う。
この点では、ゴルバチョフこそ、
東欧の流動化の仕掛け人であり、見
方によっては、マルクス・レーニン
主義の「裏切り者」、本物の「修正
主義者」だと言えるかもしれない。
だが同時に、このようなレッテルを
無意味にするほど大胆かつ積極的に
社会主義体制を打破しないかぎり、
ソ連に明日はない、という深刻な認
識に立脚している点

で、ゴルバチョフはま
さに歴史的な存在な
のである。
ところで、東欧諸国
に次いでソ連まで民主
化を進めるとなると、
このような改革を全面
的に拒んでいる中国共
産党のかたくなな姿勢が
逆に浮き彫りされてく
る。中国当局は去る一
月初旬の北京の戒厳令
解除にもかかわらず、
より一層の恐怖政治と
軍・警察による締めつ

・チャウシェスク体制下のルーマニ
アが悲劇的な結末を迎え、チャウシ
ェスク大統領夫妻が処刑されたとの
ニュースがVOAやNHK短波放送
で伝えられたとき、あちこちの大学
では学生たちが爆竹を鳴らして歓声
をあげていたのである。

▲▲▲
日本政府の矛盾した姿勢
▼▼▼

こうして中国は、いまや歴史の潮
流にまっとうから挑戦しているの
であるが、やがて、そのような虚勢も
内部から崩れてゆくにちがいない。
わが国は、ソ連におけるゴルバチ
ョフ改革を評価し、東欧の民主化に
拍手を送るならば、中国当局の姿
勢には同調できないはずである。に
もかわからず東欧諸国への支援を表
明する一方、中国への同情を示すと
いう政府・外務省の姿勢はきわめて
矛盾しており、また、野党各党も一

が安定しているがゆえに、さまざま
な批判や不満がゴルバチョフに対し
てつきつけられているのだともい
え
中には、ソ連もいずれは東欧化し、
政治的多元主義へ移行せざるを得な
いだろうという認識が秘められてい
けを強化しつつある。一方、地下に
くぐった民主化の火は消えず、先
般 中国の東欧における最大の友邦



(なかじま・みねお)